様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２４９７

研究課題名（和文）ヴィクトリア朝文学における郵政改革の影響とそれに伴う犯罪の社会心理学的研究

研究課題名（英文）Social Psychological Study of the Influence of the Postal Reform on Crime in Victorian Literature

研究代表者
松岡　光治（MATSUOKA, Mitsuharu）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：７０１８１７０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ヴィクトリア朝初期の郵政改革――1840年に発行された世界初の切手と同時に国内の手紙を均一の配達料金とする「1ペニー郵便制（Penny Post)」が導入されたあと、40年代に建設・投資ラッシュとなる鉄道を利用して手紙が迅速かつ大量に配達されるようになった通信革命――に着目し、ヴィクトリア朝の文学作品に描かれた郵政改革の影響を分析することによって、それに伴う犯罪の社会心理学的な文脈を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ヴィクトリア朝の郵政改革では、料金前納の切手や郵便ポストの採用により郵便局員との接触がなくなったことで、差出人の匿名性が一気に高まって様々な犯罪を誘発したが、そうした匿名性の高い犯罪について当時の文学作品に見出せる歴史資料を通して社会心理学的に分析することで、ヴィクトリア朝以上に通信量が激増した現代の情報化社会――脅迫、中傷、勧誘、詐欺の迷惑メールやSNSのメッセージに悩まされる高度情報社会――における匿名性の高いサイバー犯罪の予防・対策に資するデータが得られた。

研究成果の概要（英文）：The Penny Post of 1840, which charged for domestic letters at a uniform delivery rate, enabled letters to be delivered quickly and in large quantities, especially after combination with the railway boom of 1845-46. This research focused on the impact of the postal reform as it was depicted in Victorian literary works and clarified the socio-psychological context of the crimes that accompanied it. The research also provided data of relevance to the prevention and countermeasures of highly anonymous cybercrimes in the modern information society, such as threats, slanders, fraudulent junk mails and SNS messages.

研究分野：英文学

キーワード：ヴィクトリア朝　郵政改革　１ペニー郵便制　犯罪　社会心理学　ディケンズ　ギャスケル　『荒涼館』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ヴィクトリア朝の通信革命を扱った最近の研究としては、Catherine J. Gordon, _Posting It: The Victorian Revolution in Letter Writing_ (2009) と Kate Thomas, _Postal Pleasures: Sex, Scandal, and Victorian Letters_ (2011) がある。しかし、前者は通信革命の歴史と新しい郵便制度のヴィクトリア朝社会への影響を例示しているものの、羅列的な事実の描写に終始しており、引用された文学・歴史の資料には批判的洞察を含んだ解釈がなされておらず、通信を使った当時の犯罪も現代のサイバー犯罪も考察されていない。後者は 1840 年の郵政改革から世紀末までの郵便制度を扱っているが、それは階級・結婚・同性愛が複交雑する性関係のメタファーとしての通信ネットワークであり、社会の動向や時代の情勢に影響を与えて人々を犯罪に駆り立てたものとして分析されているわけではない。

現代社会の通信と犯罪に関しては、サイバー犯罪に特化した学会がそもそも日本国内にはなく、NPO の情報セキュリティ研究所がサイバー犯罪のシンポジウムを定期的に開催しているものの、議論の中心は予防と対策である。海外では High Technology Crime Investigation Association が最大の学術研究団体であるが、その目的はミッションとして掲げているハイテク犯罪の調査と予防にある。これは、サイバー犯罪に限らず何事であれ、緊急事態に陥った場合、抜本的な根治療法のための原因解明よりは、応急処置のための予防と対策が最優先されるからに他ならない。

犯罪者を脅迫に導く誘因と被害者が脅迫に屈する理由には複雑で長い心理的なプロセスがあり、事件直前の両者の状況の解析だけでは不十分である。言い換えれば、ヴィクトリア朝の通信革命にせよ、現代の情報技術革命にせよ、そうしたパラダイム・シフトによって人々の価値観が大きく変化した中で、脅迫の多くは社会的・心理的な要因が複雑に絡み合った末に発生していることを認識する必要がある。

ヴィクトリア朝の英国と現代の日本を比較するのは奇異に思えるかもしれないが、産業革命や通信革命の恩恵がその弊害をほとんど隠蔽してしまっていた事実を考えると、日本は 150 年ほど遅れて英国と同じ轍を踏んでいると言わざるを得ない。本研究を始めるに至った動機は、ヴィクトリア朝初期の郵政改革の目玉であった「1 ペニー郵便制 (Penny Post, 1840)」の弊害として生じた犯罪に注目し、第一級の歴史資料の意味を持つ同世代作家たちの作品に反映された当時の時代精神および社会風潮に照らしながら、犯罪の動機を社会心理学的に分析することにより、分析の結果を現代の日本社会における類似した犯罪の予防と対策に役立てることができると考えたことにある。

２．研究の目的

本研究の目的は、ヴィクトリア朝初期の郵政改革――1840 年に発行された世界初の切手と同時に国内の手紙を均一の配達料金とする 1 ペニー郵便制が導入されたあと、40 年代に建設・投資ラッシュとなる鉄道を利用して手紙が迅速かつ大量に配達されるようになった通信革命――に着目し、主として Dickens, Gaskell, Gissing の作品の中に描かれた郵政改革の影響とそれに伴う犯罪の社会心理学的な文脈について、当時の主要ジャーナルや非文学領域の文献に見られる犯罪言説の文脈と比較検討しながら明らかにすることにより、犯罪の根本的な原因を突き止めることであった。

遠く離れた肉親や親友とのコミュニケーションを促進するために導入された 1 ペニー郵便制は、皮肉なことに宣伝や搾取目的で大量の手紙が無差別に送られる結果となった。そのような数量の増加と、料金前納の切手や郵便ポストの採用により郵便局員との接触がなくなったことで、差出人の匿名性が一気に高まったが、こうした匿名性の高い犯罪の予防・対策は、情報技術革命によってヴィクトリア朝以上に通信量が激増した現代社会にとっても喫緊の課題である。少なくとも通信関係の犯罪に限れば、郵政改革後のヴィクトリア朝社会は 150 年後の現代社会――脅迫、中傷、勧誘、詐欺の迷惑メールに悩まされる高度情報社会――を先取りしていたと言える。

本研究ではヴィクトリア朝の文学作品を一次資料とし、産業革命後の郵政改革に付随する犯罪の大半は激変した社会環境に人々が適応して勝ち残ろうとする際に誘発される一方で、レッセ・フェールによって自己責任を強調するヴィクトリア朝の支配的なイデオロギーが弱者を抑圧してしまい、そうした心理的負荷が弱者を犯罪に対して無抵抗にしたという仮説を立て、ジェンダー・階級・人種に加え、政治・経済・法律・医療・宗教・教育などに見られる当時の不条理な権力構造と犯罪の関係を分析することによって、この仮説の実証を試みた。

３．研究の方法

平成 29 年度と 30 年度はディケンズ、ギャスケル、ギッシング、平成 31 年度／令和元年度と 2 年度は Dickens に焦点を絞って、郵政改革の影響とそれに伴う犯罪についての言説と文脈を精査し、改革後に大きく変化した時代情勢や社会動向の影響を受けた犯罪者と被害者の精神構造や思考態度を分析することで、犯罪の社会心理学的な要因を突き止めることを目指した。研究方法としては、研究代表者がホームページ上で公開している KWIC コンコーダンス（Hyper-Concordance <http://victorian-studies.net/concordance/>）を活用し、上記の作家たちの作品から文脈

を伴った通信と犯罪に関連する語彙と言説を取り出し、当該箇所を校訂版と照合しながら精読および分析する方法を採った。同時に、非文学領域の文献、主要ジャーナルに見られる郵便関係の犯罪の言説に加え、通信犯罪についての最新の論文・研究書を踏まえつつ、19 世紀イギリスの時代精神と社会風潮だけでなく、犯罪を助長するヴィクトリア朝の人々の思考や習俗などの根底にあるエートスについても考察し、「２．研究の目的」で提示した仮説を実証することにした。

ディケンズの場合、手紙は秘密の隠蔽、隠蔽された秘密の暴露、脅迫の手段となっており、同時に犯罪者と被害者の心理だけでなく、彼らが住む空間を理解する手段にもなっている。そうした点が顕著に見られる _Bleak House_ (1852-53), _Little Dorrit_ (1855-57), _Great Expectations_ (1860-61) を取り上げ、犯罪の言説とその文脈を社会心理学的な観点から解析することにした。

ギャスケルの場合、_My Lady Ludlow_ (1858) の年老いた語り手は「昔の郵便は配達が週 3 回だったので熟読されたのに、今は毎日 2 回だから要点だけの無愛想なものが増えた」（第 1 章）と嘆いているが、郵政改革後の郵便物の急増による短文形式の内容は必然的に誤解を通して様々な問題を生み出した。そうした誤解が生む人間関係の軋轢は、カーライルが近代資本主義下の労使関係に読み取った “cash nexus” に端的に見られ、下僕が主人の秘密を握って手紙で脅迫する “Right at Last” (1858) のように、ギャスケル作品ではモチーフとして使用されることが多い。しかし、手紙を使った犯罪の動機は必ずしも金銭とは限らず、当時の支配的なイデオロギーが人々を抑圧した結果として生じた心理的な問題が絡んでいるので、手紙がプロットの重要な構成要素となる _Cranford_ (1851-53), _Ruth_ (1853), _Wives and Daughters_ (1864-66) を中心に考察することにした。

４．研究成果

(1) 平成 29 年度と 30 年度の研究成果は、日本ギャスケル協会編『比較で照らすギャスケル文学』（大阪教育図書、2018 年 10 月 15 日刊行）に査読付き論文として掲載された第 9 章「ギャスケルとディケンズ——郵政改革前後の手紙と犯罪」、そして松岡光治編『ディケンズとギッシング——底流をなすものと似て非なるもの』（大阪教育図書、2018 年 12 月 25 日刊行）に収められた序章「ディケンズとギッシングの隠れた類似点と相違点」および第 6 章「イギリス近代都市生活者の自己否定・自己疎外・自己欺瞞」として発表した。

① 前者のギャスケルとディケンズの論文では、時代背景が郵政改革以前と以後に設定されたギャスケルとディケンズの作品におけるプロットの仕掛けとしての手紙と犯罪、特に脅迫 (blackmail) の問題に焦点を定め、手紙に書かれた秘密を暴露するという脅迫と、脅迫のツールとしての手紙の悪用・乱用とについて分析した。

② ギャスケルの場合、_North and South_ (1854-55) の主人公 Margaret Hale に “there’s good and bad in everything in this world”（第 17 章）と言わせているように、郵政改革についても様々な作品でその功罪を暗示的に描いている。例えば _Cranford_ の語り手 Mary Smith は、インドで行方不明になった Peter Jenkyns とおぼしき人物に宛てた手紙を出す際に、郵政改革で導入されて間もない郵便ポストに入れた瞬間に抱く「過去の人生同様に取り返しがきかない」（第 2 章）という不安は、手紙が人から人へ途切れることなく手渡されていた時代にはなかった感覚である。しかし、彼女は Peter Jenkyns の母親が出しても届かなかった過去の古い手紙を受け継ぎ、新たに書き直した手紙を送って彼をインドから帰国させることによって、郵政改革以前の郵便システムの不備（誤送や遅配）がもたらした肉親関係の断絶を修復している。女装の罪で家父長制の典型的な父親に打擲されて家出した息子と残された肉親の姉 Miss Matty との絆を「女同士の絆」として郵政改革後に再び結んでいるのである。一方、_Mary Barton_ (1848), _Ruth_, _Wives and Daughters_ における手紙は、秘密に関する脅迫や金銭授与を伴う脅迫として使用されている。

③ 科学技術の画期的な発明には必ず功罪があり、社会問題化する弊害の最大の共通点としては、人間の生活に快適さと便利さを与える一方で、恩恵に浴せない人間を周縁化することで従来の社会格差を広げてしまうこと、そして新たな人間関係とビジネスを作ると同時に新しい種類の犯罪を生み出すことが挙げられる。_Bleak House_ の浮浪児 Jo the crossing-sweeper は「人々が読み書きし、郵便集配人が手紙を配達するのを見ても、その言葉が少しも分からない」（第 16 章）ので、郵政改革の恩恵を受けることなく、社会システムの埒外に追いやられてしまう。産業革命であれ、通信革命であれ、情報技術革命であれ、それらの負の遺産は、元来からある様々な格差ゆえに情報弱者が悪循環に陥って社会的に疎外される一方で、そうした弱者を含めた一般大衆に対する様々な犯罪が法の網をくぐって巧妙に、多くは匿名性を利用してなされることが明らかになった。

④ 後者のディケンズとギッシングの論文では、大量に書き残して書簡集として出版されている両作家の手紙を援用し、それぞれヴィクトリ朝の中期と後期の時代精神および社会風潮を捉えながら、イデオロギー、階級、ジェンダーに見られる両作家の無意識に抑圧された罪悪感の表象を分析した。この論文は平成 29 年度にディケンズ・フェロウシップ日本支部の秋季総会（東京大学駒場キャンパス、2017 年 10 月 7 日）で主宰したシンポジウムにおいて、パネリストとして研究発表した「ディケンズとギッシングの隠れた類似点と相違点」が、『ディケンズとギッシング』の序章になっている。このディケンズとギッシングの編著でも扱われているが、広告・宣伝などのために個人宛てに印刷物が直に郵送されるダイレクト・メール方式による詐欺行為を通して自分に有利な縁故関係を拡大している _Our Mutual Friend_ (1864-65) の Veneering 氏、都

市文明が原因と思われる精神的な病によって夫宛ての手紙を開封する _The Whirlpool_ (1897) の Alma Rolfe、広告が氾濫する _In the Year of Jubilee_ (1894) で同じ階級の相手に対する蔑視の手紙を送る Fanny French などは、通信革命の負の遺産を体現する加害者である。そうした人物のさらなる詳細な分析を通して、愛情と金銭が動機となることが多い手紙と犯罪だけでなく、鉄道や郵便の発達による急激な社会変化がもたらした心理的な問題も明らかにすることが、今後の課題として残されている。

(2) 平成 31 年度／令和元年度と 2 年度の研究成果は、2020 年のディケンズ没後 150 年を記念して単独編集で出版した英語論文集 _Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays_ (Athena Press, 25 December 2020) の第 13 章 "'I Can't Help Writing It": Maladies of the Penny Post in _Bleak House_" として発表した。_Bleak House_ は、郵政改革後の社会という小説の舞台で手紙がプロットの展開に重要な役割を果たすだけでなく、作品の構成やテーマとも深く関わっている。

① 1 ペニー郵便制の恩恵を受け、残存する 14,000 通の他に消失分、焼却分、紛失分を含めて大量の手紙を書いたディケンズには、_David Copperfield_ (1849-50) の楽天的な登場人物 Wilkins Micawber のように何かを書かずにおれない濫書狂 (graphomania) という強迫観念が見出せる。その原因は、悪化していた結婚生活において逃げ場を失ったディケンズが、時代とともに変化していた出版形態によって連載作家として常に追い立てられていたストレスにある。しかし、意識的・無意識的に自己を投影して登場人物を描くことで、生来的に正義と善の側に立つ自己の像を確認しようとしている作者の姿も同時に読み取れる。ただし、Micawber のモデルである実の父から手紙でたえず金の無心をされていたディケンズが、郵政改革による新しいシステムの悪弊について見て見ぬふりすることはなく、脅迫の手段として手紙が頻繁に使用されるようになった時代の変化に敏感に反応していることが判明した。

② _Bleak House_ では、郵政改革で大量の手紙を出せるようになった中産階級の Jellyby 夫人が公的領域における慈善活動に熱中しているが、それは私的領域における家事や育児といった現実から逃避しているからに他ならない。彼女は国内の社会問題という現実から逃避すべく海外の問題へ国民の目をそらそうとする政府のパロディーだと言える。同時に、手紙を中心とする彼女の慈善行為は、レッセ・フェールによって経済活動を理論的に支えてもらったブルジョアジーのように、社会的な強者が弱者に対して自己責任を負わず、意識的（あるいは自己欺瞞的）に犯している道徳的な不作為の罪を不問に伏すための口実となっている。

③ Bucket 警部が自分の家の下宿人 Hortense を真犯人として突き止めることができたのは、Lady Dedlock に対する讒言の手紙を書いてポストに投函する彼女の姿が、その監視を頼まれた警部の妻によって何度も確認されていたからである。この種の犯罪が、解雇された労働者階級の貧しい女中でさえ、1 ペニー郵便制の恩恵を受けて、郵便局で顔を見られることなく、切手を貼った手紙を郵便ポストに投函できるようになった郵政改革の弊害であることは間違いない。この Bucket 警部は、作品中で気質的にディケンズにもっとも近い人物だが、彼には秘密事項に関して手紙を嫌い、自分の手帳に書き込む習慣がある。郵政改革で手紙のやり取りが激増した時代において、自分の手帳にしか書かない彼の行為は、自分自身に宛てて手紙を書くような代償行為として捉えることができる。それはヴィクトリア朝の科学技術の急激な発展によって複雑化した社会で、職業的に公的生活と私的生活という二つの側面を調和させなければ生きていけない結果、孤独感や疎外感といった否定的な感情をなだめ、麻痺させるための行為と言える。

④ Bucket 警部もディケンズも自分の感情を胸に閉まっておけない人間であるが、そうした感情は書くことによって不安とストレスに満ちた沈黙の鬱状態から逃れることを可能にしてくれる。これは急速に発展した情報通信技術に取り憑かれたヴィクトリア朝の人々に多少なりとも見られた傾向である。1 ペニー郵便制は社会にヴァーチャルな生活をもたらし、不安とストレスを生む大量の情報との格闘を余儀なくさせ、現実の生活を脅かした。しかし、書くことをやめるのは言易行難であり、そうした緊張を緩和させるには書くことをやめず、Jellyby 夫人のように流れに身を任せるしかない。まさにその理由で、ディケンズも手紙や小説で自分の感情を書き続けるしかなかったのだ。一人称の語り手 Esther は「私は書かずにおれない」（第 3 章）と言っているが、どんな感情であれ、それを仕分けして、（親友の Ada に頻繁に送っている手紙のように）書くことによって精神のバランスを保つことができる。彼女は、語り手として他の登場人物について書いている時でも、「どうしてか分からないが、いつも自分自身について書いているような気がする」（第 9 章）と告白しているが、これは抑圧した欲望についての自己言及的な告白である。ディケンズもまた客観性のために意識的に自分自身のことを書くまいとしているが、無意識的に自分自身を書いてしまっている。社会の矛盾は人間をストレスで不快・不安にするが、そうした否定的な感情から逃れる最善の方法は、それを抑圧して他人が持っているものとして処理することである。この防衛機制としての投影は、ディケンズの場合は手紙や小説を強迫観念的に書くことによって、ちょうど視覚の魔術師エッシャーが描いたリソグラフ、_Drawing Hands_ (1948) のように自己言及的な行動となっている。そうしたパラドックスを体現しているのが語り手 Esther であるが、語り手が作者の分身であるとするならば、彼らの自己言及的な行動は通信革命によって処理しなければならない情報量の激増が生み出す心理的な問題、そしてそうした社会の矛盾を読み解くための鍵を提供してくれることが明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 松岡光治	４．巻 1
２．論文標題 ギャスケルとディケンズ――郵政改革前後の手紙と犯罪	５．発行年 2018年
３．雑誌名 比較で照らすギャスケル文学	６．最初と最後の頁 113-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松岡光治	４．巻 1
２．論文標題 ディケンズとギッシングの隠れた類似点と相違点	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ディケンズとギッシング――底流をなすものと似て非なるもの	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松岡光治	４．巻 1
２．論文標題 イギリス近代都市生活者の自己否定・自己疎外・自己欺瞞	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ディケンズとギッシング――底流をなすものと似て非なるもの	６．最初と最後の頁 107-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Mitsuharu MATSUOKA	４．巻 1
２．論文標題 "I Can't Help Writing It": Maladies of the Penny Post in _Bleak House_	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Dickens and the Anatomy of Evil	６．最初と最後の頁 223-240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松岡光治
２．発表標題 ディケンズとギッシング――近代都市生活者の自己否定、自己疎外、自己欺瞞
３．学会等名 ディケンズ・フェロウシップ日本支部
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 松岡光治（編）	４．発行年 2018年
２．出版社 大阪教育図書	５．総ページ数 vi+298
３．書名 ディケンズとギッシング――底流をなすものと似て非なるもの	

１．著者名 Mitsuharu Matsuoka	４．発行年 2020年
２．出版社 Athena Press	５．総ページ数 xiv+366
３．書名 Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ディケンズ・フェロウシップ日本支部平成29年度秋季総会プログラム
http://www.dickens.jp/agm/2017/agm-2017.pdf
『ディケンズとギッシング――底流をなすものと似て非なるもの』（大阪教育図書，2018）
http://victorian-studies.net/cd-gg.html
Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays (Athena Press, 2020)
http://victorian-studies.net/dickens-2020.pdf

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関